

INTERVIEW

自治医科大学 大学参与
医学部 医学教育センター センター長
内科学講座アレルギー膠原病学部門 教授
岡崎仁昭 先生



自治医科大学における 学生教育に携わって

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

試験問題の作成をきっかけに医学教育の道へ

山田隆司(聞き手) 今日自治医科大学に、医学教育センター センター長の岡崎仁昭先生をお訪ねしました。今年、自治医科大学は医師国家試験10年連続第1位という快挙を成し遂げています。ぜひ、自治医大における学生教育についてお話を伺えればと思います。

まずは、先生が自治医科大学を卒業してから、医学教育に携わることになるまでの経緯についてお話しいただけますか。

岡崎仁昭 私は宮城県出身の7期生で、国立仙台病院(現 国立病院機構仙台医療センター)で初期研修後、公立の病院、義務年限中に大学院、その後、診療所に勤務しました。大学院はアレルギー膠原病学部門に入りました。教官の湊 長博

先生(現 京都大学総長)はNK細胞の世界的研究者であり、厳しく指導していただいたことは後の力となっています。

その湊先生が准教授になられた際に卒業試験や総合判定試験問題の作成を担当されることになり、指導を受けていた大学院生第一号の私が問題の作成を拝命しました。これが、私が医学教育に関わることになった出発点です。

その後、教務委員や5、6年生の総合判定試験部会長を務めたりしたのですが、2008年の新年会の席で当時の高久史磨学長から「ちょっと、ちょっと」と呼ばれて「大学に医学教育センターを作るから、キミ、担当してくれないか」というお話をいただきました。正直なぜ自分が？と

いう感じでしたが、他先生方のお力添えもあって教育センターの設立に関わり、2008年にセンター長に就任しました。

山田 当時、教育センター設立に至る背景には何があったのでしょうか。

岡崎 留年する学生が増えてきたということもあって、大学上層部が教育体制見直しの必要性を感じていたと聞いています。また、2005年からは共用試験が導入されたこともあり、システムティックに学生を支援する仕組みが必要だったのだと思います。

山田 自治医大の学生は義務年限があるので、留年するとその分義務年限が増えたり、あるいは留年すれば県にとっては、その年の卒業医師の2人のうち1人が欠けるわけですから大ごとです

よね。

岡崎 そうなのですよ。

山田 学長に指名されたとはいえ、自分の学問的な興味や研究、臨床医としての成長を諦めて医学教育にシフトしていくことに葛藤はありませんでしたか。

岡崎 もちろん専門を追求したい思いはありました。ただ、自分はたまたま本学の試験や日本内科学会の資格認定試験に関わっていたおかげで、そのときから比較的広範囲にわたって教えることができました。だから、声をかけていただいたときに「やればできるかもしれない」というのはありました。自分は卒業生でもあるし、学生のためにやってみようと思ったのです。

医学教育センターの取り組み

山田 医学教育センターの活動について教えていただけますか。

岡崎 センター長になってすぐに、新6年生で成績がふるわない20人ほどを集めて勉強会を始めました。そうしたところあまりのできなさにびっくりしたのですね。それから本腰を入れて、週1回は勉強会をして徹底的に鍛えることを始めました。

山田 全体的に学生を指導するというよりは、まず脱落する学生を出さないように注力したわけですね。

岡崎 はい。私は大学院卒業後にスタンフォード大学医学部のリウマチ免疫科に2年間留学したのですが、そのときたまたま受けたセミナーで教

育学の教授が「優秀な学生を教育するのは誰でもできます。できない学生をいかに引き上げるか、これが教育です」「講義をただけでは学生は覚えません。記憶するには音読。コアの内容を最低5回、声に出させて繰り返すのが有用です」と言っているのを聞いて、そのときは「ええ？」と思ったのですが、教育センターで実践してみたらはその効果を実感しています。

山田 なかなか大変なスタートだったのですね。

岡崎 情報センターには情報を扱うIR部門があって、本学学生の入学時の成績と卒業時の成績、国家試験の合格率との関係、入学時成績の地域差などについてデータをとって分析しているのですが、「入学時の筆記試験の成績は卒業時の成